

〔研究ノート〕

現代モンゴル語における
「唇の母音調和」について

栗 林 均

はじめに

周知のように、モンゴル人民共和国では1940年代にいわゆる「文字改革」が行われた。これによって、伝統的なたて書きの蒙古字は公式の場から姿を消し、モンゴル語はロシア字をもって表記されることになった⁽¹⁾。新しいロシア字アルファベット——モンゴルではこの直截的な表現を避けて「新文字」と呼ばれる——は、この国の識字運動の推進に強力な武器としてはたらき、現在ではモンゴル国民の間に完全な定着をみている。

しかし、「文字改革」は単なる文字の置き換えにとどまるものではなかった。それは伝統的な蒙古「文語」と切り離しがたく結びついていた蒙古「字」を廃止することによって、蒙古文語の伝統から自由な、新しい書きことばの創造に向かう重要な足がかりとなったのである。

13世紀以来、モンゴル人の書きことばとして用いられてきた蒙古文語は、その綴りや語法のアルカイズムによって、現代の口語から著しくかけ離れていたことから、できるだけ口語に近い、いわば「言文一致」の書きことばが要求されていた。こうして「新文字」で綴られる新しい書きことばは、モンゴルのもっとも有力な口語であるハルハ方言の基礎の上に成立することになった。

新しい書きことばの綴り字法——すなわち「新文字」正書法をとってみると、それがハルハ方言の音声的な特徴を反映することにつとめ、またそれをかなりの程度実現していることは明らかである。とはいえ、正書法がハルハ方言の音韻をそのまま表わしていると、無条件に受け入れることはできない。

第1に、「新文字」正書法はハルハ方言の音韻的な特徴だけを依り所として作成されたわけではない。ダムディンスレン(Ц. Дамдинсүрэн)によれば、このほか、伝統的な蒙古文語の正書法、および当時ソ連邦内のブリヤートとカルムイクで使用されていたロシア字正書法も、「新文字」正書法の作成の際に依り所としたという⁽²⁾。また口語の語論、つまり形態論的な特徴も考慮した、という証言も見逃すわけにはいかない。

第2に、正書法が一見ハルハ方言の音声的特徴を反映しているように見えながら、実は別の原理に従っていて、音声的・音韻的根拠の薄弱なものもありうる。本稿では、これまでともすると混同され同一視されてきた、弱化母音に関する正書法とハルハ方言の発音および音韻の間のズレを明らかにしたい。

この問題に関連して、モンゴルでは新しい書きことばと並行して、「規範化された話しことば」が育成されてきた事実を指摘しておかなければならない。たとえば、ラジオ、テレビ、映画、演劇、官庁、学校などで使われる公式的な話しことばが、それである⁽³⁾。この「標準語」ともいうべき、規範化された話しことばは、口語としてのハルハ方言と多くの基本的な特徴を共有しながらも、両者は全く等しいものではない。そのもっとも大きな相違点のひとつは、「標準語」としての話しことばが多分に書きことばの影響を受けていることである。その発音に関しても、「綴り字発音」的に、正書法綴りの影響を受けて、ハルハ方言の発音と異なるものが少なくないと思われる。

しかも、「標準語」の発音は、規範化された「正しい発音」として、ハルハ方言の発音の優位にたつことが多い⁽⁴⁾。とりわけ、弱化母音のような不安定な発音に関しては、「標準語」の発音が正誤の判定役としての役割をも負いがちである。このため、ハルハ方言と正書法との関係を検討する際には、「標準語」としての話しことばの介在によって事実関係を見失わないよう、特に注意が必要と思われる。まずもってわれわれに必要とされるのは、「新文字」正書法の作成時にその基礎に置かれたハルハ方言を純粹に口語あるいは方言として記述した、信頼できる音声学的資料である。

1.

ハルハ方言において、短母音は単語の第1音節にあらわれるものと第2音節以降にあらわれるものとの調音的・聴覚的に著しい差違が認められる。服部四郎氏はチャハル方言の短母音の特質について、

「この方言では、他の多くの蒙古諸方言と同様、短母音は第1音節に現われるもののみが、互に明瞭に区別された調音を有し、第2音節以下の短母音は、いずれも中性母音に近づき互に明瞭に区別されず、屢々消滅する⁽⁶⁾。」

と記述しているが、これはハルハ方言についてもそのままあてはまる。このように、調音の著しい弱化を特徴とする第2音節以降の短母音は「弱化母音」あるいは「あいまい母音」と呼ばれている。

ハルハ方言の弱化母音の調音的・聴覚的性質は、次のウラディーミルツォフ(Б. Я. Владимирцов)の記述に余すところなく述べられている。

「これは、発音に際して発音器官が不活発に、たるんで働く母音である。そうした調音の消極性のために、それらは発音器官の十分な働きに際して得られるような特有の音色が得られない。ハルハ方言では、不完全な形成の母音〔=弱化母音〕は弱化した調音を伴うのみならず、略して(бегло)発音され、第1音節にはけっして現れない。それゆえ、それらはきわめて多くの音色をもち、これがそれらの正確な判定を困難にしている。つまり、これらの音は全く結合的なもので、異なった位置でいくぶん異なって聞こえる⁽⁶⁾。」

現代モンゴル語の「新文字」正書法のなかで、弱化母音に関する規則の占める割合が大きいことは、こうした弱化母音の不安定な性質に関係している。規範としての正書法は、あいまいさを書き手の判断や嗜好に委ねておくわけにはいかないのであって、それらに明解かつ統一的な基準を示すことを使命としているからである。弱化母音に関しては、単語のなかでそれらを書くべき位置と、その際どのような母音字をあてるべきか、ほとんどすべてを正書法で規定して、あいまいさが残らないようにしている。

本稿でとりあげるのは、弱化母音に関する正書法規則のうちで「唇の母音調和」として知られる、弱化母音字の書き分けに関する規則である。これは、単語の第1音節にあらわれる母音に従って、第2音節以降にどのような母音字を

書くかを定めた規則である。そこでまず、ハルハ方言の単語の第1音節にあらわれる母音をみておかなければならない。

表1.

短母音字	a	y	o	ə	Y	ɵ	и
長母音字	aa	yy	oo	əə	YY	ɵɵ	ий
二重母音字	ай	уй	ой		Yй		

表1. は、「新文字」正書法で単語の第1音節に書かれる母音字の一覧であるが⁽⁷⁾、これをもってそのままハルハ方言における第1音節の母音をあらわすとみて以下の議論にさしつかえないと思われる。

ダムディンスレンの「新文字規則」によれば「唇の母音調和」の原理は次のように説明されている。

まずモンゴル語の母音は、発音に際して唇のまるめが積極的に関与するか否かによって円唇母音と非円唇母音の2種類に大別される。

「母音 a, ə, и の3つは、発音に際して唇が関与しないので非円唇母音という。他の o, y, ɵ, Y の4つは発音に際して唇がつぼみ、積極的に関与するので円唇母音という⁽⁸⁾。」

「唇の母音調和」は、円唇母音と非円唇母音との結合についての規則である。

「語頭音節にある母音は、さらに同じ語にあらわれる他の母音を決定して、しかるべき母音を従える。この法則を唇に関する母音調和という⁽⁹⁾。」

これは具体的に次のよう説明される。

「語頭〔音節〕の母音 o と ɵ を発音するときの唇の形状は、その単語を発音し終るまでそのまま失なわれないでいようとするので、それ以降の母音を従えてすべて o あるいは ɵ となすに至る。他方、語頭〔音節〕に a と ə があれば、その語〔の発音〕が終るまで唇の状態は開いているので、a, y, の母音には a が従い、ə, Y の母音には ə が従う⁽¹⁰⁾。」

ダムディンスレンがこれを口語、すなわちハルハ方言の音声現象としてとらえていたことは、次の文からも明らかである。

「新文字の規則では、この法則を重要なものとみなして、第2音節以降のす

すべての母音、とりわけ弱化母音の書き分け規則を設けた⁽¹¹⁾。」
その書き分け規則は表2. の通りである。(弱化母音字の и はどのような母音のあとにもあらわれる)

表2.

第1音節に下の母音があれば：			第2音節以降に下の母音字を書く	
а	аа	ай	а	и
у	уу	уй		
о	оо	ой	о	
и	ий		э	
э	ээ			
ү	үү	үй		
ө	өө		ө	

こうして、弱化母音をあらわすために用いられる文字は、第1音節にあらわれる7つの短母音字のうち、y と Y を除く a, o, э, ө, и の5つに限られていることがわかる。y と Y の2字は原則として、単語の第2音節以降に単独であらわれることがないというのが「新文字」正書法の特徴である⁽¹²⁾。

2.

「唇の母音調和」に関するダムディンスレンの説明を検討すると、この規則は円唇母音と非円唇母音とが截然と区別されて、互いに排他的な結合をなしているように見えながら実はそれが一貫していないことがわかる。y と Y の2つは、円唇母音とされながら、むしろ非円唇母音の a, э に準じて扱われている。и を中性的な母音として除外して考えると、円唇化が一貫しているのは、第1音節に o と ө がある場合に限られている。

確かに、単語の第1音節に円唇狭母音の y と Y があるとき、それに続く弱化母音が非円唇母音としてあらわれることを積極的に認めた方言記述もないわけではない。たとえば次の引用はルードニェフ (А. Д. Рудневъ) によるホリ・ブリアート方言の観察である。

「東部〔蒙古語〕方言やハルハ・ウルガ方言の単語に大きく影響している順

行的な円唇同化(唇の牽引——唇の引き寄せ)については、ブリヤート・ホリ方言のもとでは非常に僅かな程度しか認められない。はやい話し方で $\dot{y}\dot{x}\dot{y}$ というのは間違いではないであろうが、ゆっくりした発音では、すべてのブリヤート・ホリ人は $\dot{y}\check{x}\dot{e}$ あるいは $\dot{y}\check{x}\dot{e}$ (牛) といい、 $\dot{y}\check{l}\dot{u}\dot{m}$ ではなく $\dot{y}\check{l}\dot{a}\dot{m}$ (馬の腹帯) などという⁽¹³⁾。」

しかし、上の引用でも、ブリヤート方言のこの特徴を東部蒙古語方言やハルハ・ウルガ方言と対比させて指摘しているように、ハルハ方言ではむしろ第1音節の y, \dot{y} のあとでも、弱化母音に円唇化が認められることが多いのである。たとえばウラディーミルツォフも、

「判定のむつかしさにもかかわらず、それでもやはり、多かれ少なかれ明らかに観察される、幾分弱化し弛緩した母音の $\check{a}, \check{e}, \check{o}, \check{ö}, \check{y}, \check{y}, \check{i}$ を認めることができる⁽¹⁴⁾。」

として、ハルハ方言に第1音節の y と \dot{y} に対応する弱化母音を認めている。

ウラディーミルツォフは、弱化母音の \check{y} は、第1音節の $y, \dot{y}, \check{y}, \check{y}, \check{i}$ のあとにあらわれる、として次の例をあげている⁽¹⁵⁾。

$\check{b}\check{u}\check{l}\check{l}\check{y}\check{k}$ <泉>, $\check{s}\check{y}\check{g}\check{t}\check{y}$ <おかけなさい>, $\check{n}\check{i}\check{u}\check{l}\check{m}\check{y}\check{s}$ <涙>, $\check{z}\check{y}\check{i}\check{g}\check{y}\check{r}$ <ずるい>, $\check{i}\check{l}\check{a}\check{n}\check{g}\check{y}\check{j}\check{a}$ <特に>, $\check{u}\check{n}\check{y}\check{g}$ <子馬>, $\check{u}\check{g}\check{y}$ <長男>, $\check{y}\check{i}\check{d}\check{x}\check{y}\check{r}$ <うれい>。

同様に、弱化母音 \check{y} のがあらわれるのは第1音節の $\check{o}, \check{y}, \check{y}, \check{y}, \check{i}$ のあとであるとして、次の例があげられている⁽¹⁶⁾。

$\check{o}\check{d}\check{d}\check{y}\check{r}$ <日>, $\check{n}\check{u}\check{c}\check{y}\check{g}\check{y}$ <裸の>, $\check{t}\check{y}\check{g}\check{t}\check{y}$ <集めなさい>, $\check{y}\check{i}\check{l}\check{y}\check{d}\check{b}\check{y}\check{r}\check{c}\check{i}$ <労働者>, $\check{t}\check{o}\check{d}\check{d}\check{y}\check{g}$ <留金>, $\check{y}\check{l}\check{g}\check{y}\check{r}$ <例, 昔話>, $\check{d}\check{y}\check{r}\check{y}$ <満ちた>, $\check{y}\check{i}\check{r}\check{m}\check{y}\check{k}$ <かけら>, $\check{o}\check{r}\check{g}\check{y}$ <広い>。

このように、ハルハ方言の弱化母音は、正書法における「唇の母音調和」とはうらはらに、順行的な円唇同化の度合いが強く認められる。むしろハルハ方言における弱化母音の円唇同化こそ「唇の母音調和」と呼ぶにふさわしい。にもかかわらず、「新文字」正書法ではなぜ y のあとに a を書き、 \dot{y} のあとに \check{o} を書くという円唇同化の不徹底な弱化母音字の書き分け規則を採用したのであ

ろうか。

ここで、ポッペ (N. Poppe) の『ハルハ・モンゴル語文法⁽¹⁷⁾』における、弱化母音の表記法に言及しておく必要がある。この著作の音論以外の各章でモンゴル語をあらわすために用いられている表記は、弱化母音字の書き分けに関して、「新文字」正書法の「唇の母音調和」と全く軌を一にしている。つまり、単語の第1音節に書かれる短母音字 *a, u, o, e, ü, ö, i* のうち、*u* と *ü* を除く *a, o, e, ö, i* だけが弱化母音をあらわすのに用いられる。さらに、第1音節に *a* と *u* があれば、弱化母音字は *a*; *o* があれば *o*; *e, ü, i* があれば *e*; *ö* があれば *ö*; そして *i* は第1音節のどのような母音のあとにもあらわれうる、とそれぞれの書き分けが行われているのである⁽¹⁸⁾。

このポッペの表記法の根拠を、同書音論の音声学的説明のうちに見い出すことはできない。ポッペは音論のなかで *v, ə, a, !* という4つの弱化母音を認めているにすぎず、これを音論以外の章では *a, e, o, ö, i* という5つの記号であらわしていて、しかも音声学的に *v* とあらわされる母音にあるいは *a* をあて、あるいは *o* をあてている。同様に *a* に対して、ある語には *e* を、別の語には *ö* を表記しているのである。音声学的に同一の母音を、異なった母音字で書き分ける根拠について、ポッペは「語源的」(etymologisch) なものであると述べているにすぎない⁽¹⁹⁾。

しかし、そのような表記法が、語源的な裏づけをもつとは、とうてい容認しがたい。たとえば、ポッペの表記で *olon* <多くの>、*amar* <平安> のように表わされる語は、語源的に蒙古文語の *olan, amur* に結びつけられることは明らかであり、同様な例は容易に増やしていくことができるからである。要するに、ポッペの表記法は「新文字」正書法と同じ方式をとりながら、それは音声学的な根拠によるものでも、語源的な根拠によるものでもない。

実際のところ、ハルハ方言の弱化母音をあらわすポッペの音声表記 (*v, ə, a, !*) は、ラムステッド (G. J. Ramstedt) の『蒙古文語とウルガ方言の比較音声学』の方式をそのまま継承したものである⁽²⁰⁾。1903年にドイツ語で公刊されたこの論文は、その5年後にロシア語に翻訳されて出版されたが⁽²¹⁾、その際、とくに弱化母音の表記方式の改訂が行なわれたことは注目に値する。1903

年のドイツ語版では、*v, ə, a, i* の4つで弱化母音をあらわしていたのに対し、ロシア語版では、*ä, ö, y, e, o, y, i* という7つの弱化母音字が用いられている。したがって、ドイツ語版では *allvk* <多彩な>, *Bullvk* <泉>, *omvk* <高慢な> と、一様に *v* で表記されていた弱化母音が、ロシア語版では *аллак*, *буллүк*, *омок* などと表記されることになった。この表記法の改訂については、ラムステッドもロシア語版の序文で、

「おそらく、この変更によってわれわれは実際の発音をより正確に伝えている⁽²²⁾。」

と述べているように、ポツペが依拠したドイツ語版の表記よりも、ハルハ方言の発音としては、ロシア語版により大きな信頼をおくことができる。

トゥルベツコイ (N. S. Trubetzkoy) は、チュルク諸語における次のような「唇音索引」(“die labiale Attraktion”) の法則を指摘している。

「単語の非第1音節にある、音韻的に如何なる音色類の特徴も持たない音節音素が或る幾つかの円唇母音の後で円唇母音として具現される⁽²³⁾」

ハルハ方言の弱化母音に関してもこの法則は成立する。つまり、ハルハ方言の弱化母音は補い合う分布を有し、互いに対立することがないので、円唇・非円唇、前舌・後舌、広・狭等の対立が中和された、ひとつの中性的な母音音素に帰すことができる。そしてこの母音音素は第1音節の円唇母音の後で円唇母音としてあらわれているのである。

3.

ダムディンスレンによれば、「新文字」正書法の作成にあたって、「唇の母音調和」の規則は、ブリヤート語の正書法から借りてきたものであるという⁽²⁴⁾。しかし、これはブリヤート語の音的特徴を反映するために作られた規則であるというよりは、さらに、ロシア字正書法に先立つラテン字正書法にさかのぼってその起源をたどることができる。つまりブリヤート語のロシア字正書法は単に橋渡しの役を果たしたにすぎないと思われる。

1920年代から論議されていた蒙古語諸方言のラテン字化の問題は、1931年1月のモスクワ会議で最終的な決着が与えられた。そこではブリヤート、ハル

ハ、カルムイクにおけるラテン字化アルファベットが統一され、ブリヤートの文章語が基本的にハルハ方言にもとづくことが決められた。モスクワ会議の翌年に発行された『ソ連科学アカデミー—東洋学研究所紀要 I』で、ポッペはモンゴル語のラテン字化の問題点を総括しているので⁽²⁵⁾、以下これによってラテン字正書法における弱化母音の表記の問題をたどってみる。

「新しい文章語の正書法のもっとも厄介な問題は、疑いなく、単語の非第1音節に観察される弱化母音をいかに表記すべきか、という問題である⁽²⁶⁾。」
 というように、ラテン字正書法の作成に際しても、弱化母音の表記の問題は論争の種となった。つまり、弱化母音の音質が不確定なことから、決定的な表記法というものがなく、いくつかの方式が許容されるのである。

検討される第1の方式は、単語の第1音節の母音と同じ母音をもって弱化母音を表記するやり方である。これは、現実とさほど矛盾していないが、正書法としては最適でないという。そのわけは、次にみるように2つある。

「この方式は、方言学的記録には一定の条件つきで是認しうるが、正書法としては理想的でない。というわけは、これらの弱化母音は、様々な語形において長母音と交替することがあるが、そのような長母音の音質は必ずしも第1音節の母音と等しいとは限らないし、弱化母音の音質について語りうるものならば、弱化母音の音質とも一致するとは限らないからである。たとえば、*usu*〈水〉——*usār* (正書法では *usaar*)〈水で〉を比較せよ。ほかに、この方式は、弱化母音をあらゆる場合にいかに表すかの厳密な規則が与えられないかぎり、弱化母音の音質の決定が結局書き手に委ねられるので、よろしくない⁽²⁷⁾。」

第2の方式は、より少ない記号で弱化母音を表記するやり方である。つまり、後寄りの弱化母音をすべて *a* であらわし、*i* 以外の前寄り弱化母音をすべて *e* であらわす。この方式も正書法として適切でないのは、やはり長母音との交替が一貫しないからだ、という。すなわち、

「問題は、非第1音節の母音と第1音節の母音との間に一定の相関関係があって、非第1音節の母音の音質は第1音節の母音の音質によって条件づけられている、ということである。それで、たとえば *modoor*〈木で〉という語

形における接尾辞の母音は長い *o* であるが、他方 *kada* 【<岩>】という語の同じ語形では、接尾辞の母音は長い *a* である【*kadaar* <岩で>】。さきの *modoor* の場合、これは後続の長母音に対する第1音節の *o* の影響によって説明される。それゆえ、もしも第2音節の弱化母音をその音質にかかわりなく *a* という記号であらわして、<木>という単語を *moda* と書くことに決めれば、その造格形をつくる際に母音 *a* を長母音の *o* に替えることを余儀なくされるという点で大きな不都合が生じる⁽²⁸⁾。」

最後に、弱化母音と長母音との交替が一貫したものとなる方式として、表3.のような書き分けが提案された⁽²⁹⁾。これによれば、*usa*—*usaar*, *modo*—*modoor* のように、弱化母音と長母音との種類が交替することなく、同じ種類の母音をただ引きのばすだけですますことができるというわけである。

この方式がラテン字正書法として採用されたわけであるが、要するに弱化母音の表記は、単語の第2音節以降にあらわれる4つの長母音 *aa*, *oo*, *ee*, *eē* の分布にあわせて、それらに対応する短母音字を書くことにしたものである。

表3.

第1音節の母音 : 弱化母音字			
<i>a</i>	<i>aa</i>	<i>ai</i>	} <i>a</i>
<i>u</i>	<i>uu</i>	<i>ui</i>	
<i>o</i>	<i>oo</i>	<i>oi</i>	} <i>o</i>
<i>e</i>	<i>ee</i>	<i>ei</i>	
<i>y</i>	<i>yy</i>	<i>yi</i>	} <i>e</i>
<i>ø</i>	<i>øø</i>		
			} <i>i</i>

こうして、われわれは「新文字」正書法における「唇の母音調和」の本質に一步近付いたことになる。すでに2.でみたように、それはハルハ方言の弱化母音の特質によるものではない。それは、ハルハ方言における第2音節以降の長母音の生起に関する1特質を、弱化母音字の表記に投射したものである。

ラテン字正書法はまた、さきにみたポッペの『ハルハ・モンゴル語文法』における表記法のモデルとなっていたことは十分に考えられる。なぜなら、モン

ゴル語のラテン字正書法作成の中心にいたのは、当時ソ連邦のモンゴル学界で活躍していたエヌ・ポッペその人だったからである。

つまり「新文字」正書法の「唇の母音調和」とポッペの『ハルハモンゴル語文法』の表記法はともに1930年代のラテン字正書法にさかのぼる、いわば一卵性双生児だということができる。

4.

ここでは、ハルハ方言において単語の第2音節以降の長母音が、第1音節の母音によってどのような制約を受けているかをみることにする。短母音の場合には、第2音節以降にあらわれるものは調音の弱化により互いに明瞭に区別されることが困難となるが多かったが、長母音は第2音節以降にあらわれる場合も互いに明瞭に区別され、音声学的にそれらを第1音節のいずれかの長母音と同定することに困難はない。こうして単語の第2音節以降には、第1音節におけると同じ aa, yy, oo, ээ, үү, өө, ий の7つの長母音を認めることができる。

表4. は単語の第1音節の母音にしたがって第2音節以降にどのような長母音があらわれるかをまとめたものである。この表の中で、正書法の「唇の母音調和」との関係で注意を要すると思われる点は、単語の第2音節以降には aa, oo, ээ, өө とならんで yy と үү もあらわれ、しかもそれらの分布が重なっていることである。つまり、弱化母音字の書き分け規則は、第2音節以降の長母音との交替を解消するために、第2音節以降の aa, oo, ээ, өө の分布にあ

表4.

第1音節の母音			:	第2音節以降の長母音		
а	aa	ай	}	aa	уу	}
у	уу	уй				
о	оо	ой				
и	ий		}	ээ	уу	
э	ээ					
ү	үү	үй				
ө	өө		}	өө		

わせて a, o, ə, ɵ で弱化母音を表記することにしたのであった。しかし、第2音節以降にあらわれる長母音は上の4つに限られているわけではなく、yy, YY もあらわれうる。ということは、弱化母音字の書き分けによって、それらと長母音との交替を「完全に」解消することは不可能だということになる。

再びラテン字正書法にもどって例を挙げると、

jabaad 〈行って〉, *jabuul-* 〈行かせる〉,

budaad 〈塗って〉, *buduul-* 〈塗らせる〉,

orood 〈入って〉, *oruul-* 〈入れる〉

というように、第1音節の母音によってきまる第2音節以降の長母音はひとつだけではない。ラテン字正書法として採用された *jaba-* 〈行く〉, *buda-* 〈塗る〉, *oro-* 〈入る〉 という書き分けによっても、*jaba-jabuul*, *buda-buduul*, *oro-oruul* にみるように、一部の母音字の交替は避けられないのである。しかし、これを実際的な見地からみた場合、ハルハ方言には動詞活用、名詞曲用、単語派生等の接尾辞において aa, oo, əə, ɵɵ の長母音が異形態として交替するものが少ないので、これら出現する頻度の大きい長母音字を基準にすることによって、弱化母音字と長母音字との交替を相対的に最少にとどめることに成功している。書き分け規則の、正書法としての特長はこの点にある。

つぎに、「唇の母音調和」を、第1音節の母音と第2音節以降の長母音との関係からみると、第1音節の円唇母音が第2音節以降にあらわれる長母音の円唇性に制約を加えているのは、きわめて限られていることがわかる。すなわち、第1音節の o (oo, oŋ) のあとにあらわれる長母音 oo と、第1音節の ɵ (ɵɵ) のあとにあらわれる長母音 ɵɵ の場合がそれである。それ以外の場合には、たとえば第1音節の a (aa, aŋ), y (yy, yŋ) のあとには非円唇母音の aa も円唇母音の yy もともにあらわれ、円唇性による排除的な結合関係は認められない。

例： { *xaraa*-〈乾かす〉 { *xypaa*-〈集める〉
 { *xaryy* 〈堅い〉 { *xypyuy* 〈指〉

これは第1音節の ə (əə), ʏ (ʏʏ, ʏŋ) と第2音節以降の əə, ʏʏ に関しても同様である。

例： { сэрээ <フォーク> { тyрyу <頭>
 { сэрyуH <涼しい> { тyрээс <賃貸料>

第2音節以降の短母音、すなわち弱化母音の場合には、そのすべてが、円唇性（および非円唇性）に関して第1音節の母音に依存していたのに対し、第2音節以降の長母音のなかで円唇性の制約をうけているのは、oo および өө だけである。音声的観点からハルハ方言の「唇の母音調和」をみるとこのような特質が明らかになる。

これを音韻的観点から見た場合、弱化母音は「音韻的に如何なる音色類の特徴も持たない母音音素」としたように、円唇性と非円唇性の対立は中和されていて、円唇性に関して中性的な位置を占めることはさきにみた通りである。第2音節以降の長母音に関しても oo と өө が、音韻的観点から、独立した音素となりえないことは、たとえば第2音節以降で oo が aa と補い合う分布をなして互いに決して対立しないことから明らかである。つまり、単語の第1音節では円唇・後舌・広母音の oo と非円唇・後舌・広母音の aa として対立していた2つの音素が、第2音節以降では円唇性と非円唇性の対立が中和された原音素 \bar{A} としてあらわれているとみることができる。 \bar{A} は o (oo, ой) のあとでは oo として、a (aa, ай) および y (yy, yй) のあとで aa として実現される。したがって第2音節以降の oo および aa は、円唇性と非円唇性の対立が中和された同一の音素の「結合変異体」なのである。

結局、「唇の母音調和」としてみてきた現象はすべて音声的な現象であって、音韻的には単語中にあらわれる母音音素間に円唇性による共起の制約は認められない、ということが確認された。

城生伯太郎氏は、ハルハ方言における唇の母音調和について、中世蒙古語や一部のオイラート方言にこれが欠けていることから、

「唇の調和というのは、第1音節に立つ円唇母音音素 /o/ 及び /ö/ による単なる音声学的な順行同化現象をさしているものとする⁽³⁰⁾。」

と述べているが、これは氏が単語の第2音節以降の母音音素を第1音節の母音音素と同じ音素として扱っている態度と全く矛盾した見解である。「唇の母音調和」が、「単なる音声学的な順行同化現象」だと言うためには、中世蒙古語

や他方言にその現象が欠けていることをもち出すのではなく、ハルハ方言における母音音素間の関係を問題にしなくてはならない。そして「唇の母音調和」が「単なる音声学的な順行同化現象」だとしたら、第1音節の /o/ と /ö/ のあとにしかあらわれないとする第2音節以降の円唇母音を、第1音節の母音音素と同一視する氏の音韻解釈は正しくないことになる。まさに改めるべきはそのような音韻解釈である。

(註)

- (1) より正確には、ロシア字のすべてに θ と γ の2文字を加えたのがそのアルファベットである。モンゴルの「文字改革」については、坂本是忠『モンゴルの政治と経済』東京、1969年、118—119頁、および田中克彦『言語の思想——国家と民族のことば——』東京、1975年、159—165頁を参照。
- (2) Ц. Дамдинсүрэн, “Шинэ үсгийн дүрмийн тухай ерөнхий зүйл”, *Монгол хэл бичгийн зарим асуудал*, Улаанбаатар, 1959, 5—7-р тал.
- (3) 規範化された話しことばと書きことばを含めて、モンゴル語で бичгийн хэл (文語) あるいは утга зохиолын хэл (文学語) と呼ぶが、これがロシア語の литературный язык (文章語, 標準語) のうつし (calque) であることは明らかである。
- (4) 次の2書はモンゴル語の бичгийн хэл の発音を対象にしている。Ж. Л. Лувсандорж, *Монгол авианы дуудлага*, Улаанбаатар, 1975; Ж. Цолоо, *Орчин үеийн монгол хэлний авиа зүй*, Улаанбаатар, 1976.
- (5) 服部四郎「蒙古語チャハル方言の音韻体系」『言語研究』第19/20号, 83頁。
- (6) Б. Я. Владимирцов, *Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия*, Введение и Фонетика, Ленинград, 1929, стр. 55.
- (7) 表以外にも、ya, uai, ia, iu の母音字も第1音節にあらわれるが、きわめて特殊なものなので省略した。例：хуар〈花〉, гуай〈～さん〉, хиа〈小姓〉, хиур〈小旗〉。また я, е, ё, ю などのいわゆる補助母音字は、子音 j プラス表 1. の母音として考える。
- (8) Ц. Дамдинсүрэн, “Шинэ үсгийн дүрэм,” *Монгол хэл бичгийн зарим асуудал*, Улаанбаатар, 1959, 20-р тал.
- (9) 同上, 20—21-р тал.
- (10) 同上。
- (11) 同上。
- (12) 原則に反して次のような例外的な綴りもある。動詞命令形の活用語尾-гтун～

- гтүн, -тугай~-түгэй, -сугай~-сүгэй; 順序数詞をつくる語尾-дугаар~-дүгээр。また Дамдинсүрэн のような合成語は別の原理に支配されているとみるべきである。
- (13) А. Д. Рудневъ, *Хори-бурятский говоръ*, вып. I, С.-Петербургъ, 1913—1914, стр. XXVI. なお引用中の у はハルハ方言の ү に相当する母音。
- (14) Владимирцов, Указ. соч., стр., 55.
- (15) Там же, стр. 326.
- (16) Там же.
- (17) N. Poppe, *Khalkha-Mongolische Grammatik, mit Bibliographie, Sprachproben und Glossar*, Wiesbaden, 1951.
- (18) Ebd., S. 21—22.
- (19) Ebd., S. 16—17, 22.
- (20) G. J. Ramstedt, "Das Schriftmongolische und die Urgamundart phonetisch verglichen", *Journal de la Société Finno-ougrienne*, XIX :2, Helsingfors, 1903.
- (21) Г. I. Рамстедт, *Сравнительная фонетика монгольского письменного языка и халха'ско-ургинского говора*, С.-Петербургъ, 1908.
- (22) Там же, стр. II.
- (23) N. S. トゥルベツコイ, 長嶋善郎訳『音韻論の原理』東京, 1980, 299—300頁。
- (24) Ц. Дамдинсүрэн, "Шинэ үсгийн дүрмийн тухай ерөнхий зүйл," *Монгол хэл бичгийн зарим асуудал*, Улаанбаатар, 1959, 6-р тал.
- (25) Н. Н. Поппе, "К латинизации монгольского алфавита и переходу на новый литературный язык," *Записки Института Востоковедения Академии Наук СССР I*, Ленинград, 1932, стр. 19—34.
- (26) Там же, стр. 28.
- (27) Там же.
- (28) Там же, стр. 29.
- (29) Там же. ラテン字正書法の u, e, y は, ロシア字正書法の y, э, ү にそれぞれ対応する。
- (30) 城生伯太郎「モンゴル語の母音調和」『言語』Vol. 5, No. 6, 1976. 57頁。

(筆者の住所：千葉市高浜1-2 第2県営住宅6-108)